

スポーツ選手の名言と語録

豊澤 幸平

一月末、プロ野球選手であるイチローが、米国野球殿堂に日本人として初めて選出された。走攻守に数々の偉業を達成した実績が評価され、米国野球界最高の栄誉を手にした。この殿堂入りの制度は一九三六年に始められ、九〇年間で僅か三五一名が表彰されているだけである。極めて顕著な成績を残した人、或いは野球界に貢献をした人に与えられる。全米野球記者協会の投票で選ばれるが、満票に一票足りず九九・七%の高い得票率であった。彼は満票でなかったことを問われと、「やっぱり不完全であるというのはいいなあ。満票に届かなかったことは凄くよかった。生きていく上で、不完全だから進もうとできる」とユーモアとスパイスの効いた名スピーチで応え、やっぱりイチロー、と世間をうならせた。

一流のスポーツ選手は多くの記憶に残る名言を残している。

オリンピックで、有森裕子の一九九六年の銅メダル後の「初めて自分で自分を褒めたい」、北島康介の二〇〇四年の金メダル二冠後の「チヨ―気持ちがいい」、二〇〇八年の連続二冠後の「何も言えねえ」、上野由岐子の二〇二一年の金メダル後の「三年という時を経て最後まであきらめなければ夢がかなう」、二〇二四年の堀米優斗の金メダル後の「一%の可能性を最後まで信じてやったことが実った」、北口榛花の金メダル後の「名言を残すことは凄く難しいというのが身にしてみた」

彼らは日々極限まで鍛錬し限界に挑戦、栄冠を手に行っているからこそ、発する言葉に心を打たれ魅せられる。

プロ野球の監督で三度の日本一を達成している野村克也も数々の有名な語録を残している。私はその中で「勝ちに不思議な勝ちあり、負けに不思議な負けなし」を気に入っている。偶然に良い結果が出ることはあるが、失敗するのは偶然ではなく普段の努力が足りない。勝ちに奢らず、負けた時は必ず原因を知り次に生かす。私はこの言葉は昔はビジネスで噛みしめ、今はゴルフでその通りと実感している。

(二〇二五年三月)